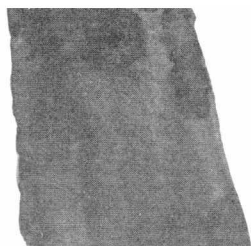


風になじんだ歌 佐多稲子 新潮社



風になじんだ歌



昭和四十二年二月二十八日 発行
昭和四十二年九月二十五日 二刷

定価 三四〇円

著 者 佐 多 稲 子

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(280)大代表一一一一
振替東京八〇八番

印刷・図書印刷株式会社 製本・神田 加藤製本所
乱丁・落丁本はお取替え致します。© Printed in Japan 1967

風になじんだ歌



装帧
下高原
健二

そこは、いのちの街だった。今そこは、いのちの生の姿で、よろばいながらも殺気にみちていた。焼け残ったビルが脚元を露出して荒れた肌をさらしていた。駅の正面に高くはめ込まれた大時計は、傷痕にうなだれて針をとめたままだった。焼けあとの空地から舗道へかけて、葦簀張りの店が同じ格好で並び、スフの下着や、鍋や下駄や、食べものを売っている。男たちは戦鬨帽のまま、肩から袋を下げて歩いていた。うす汚れた白と褐色の雑鬨の中に、もんぺの女たちもその色にとけて、何かの風呂敷包みをかい込んで歩いた。みんな同じような顔をしていた。同じような顔で混り込んでいながら、誰も、すれちがう相手を見もしなかった。どの顔も、地べたに坐ることに慣れた顔だった。空だけは、秋の澄んだ色で展がっていた。その下で街は、いのちにうごめいていた。

柳井志保にとってもそこはいのちの街だった。彼女にとってそこはいわば古巣ということでもそれを意味したし、新宿東口のその一隅に自分の居場所を確保したとき、志保は身内に慄えのみなざるのを感じたのだ。十年近いこの町の生活でこの界限は知りつくしている。そこに再び、自分の居場所をつかんだ。自分自身のものとしてそれを、とにかくつかんだ。それは柳井志保が心に決めてきたことの実現した第一歩だったのである。

終戦のとき、柳井志保は信州の赤石山脈に沿った山の村にいた。彼女の世話をしていた森下勇造が、その山の木を伐って軍の弾薬箱などを作っていたが、志保は疎開のつもりもあって、森下と呼ばれるままに新宿を離れていった。新宿ではその頃すでに、志保の働く場はなかったから、何もせずに森下の世話にだけなっているのも、志保はあき足りなかったのである。森下は軍に結びついて事業を拡張しようとしていた。男の立てる計画に、志保は自分もはまり込んでゆこうとしていた。彼女は三十を半ば過ぎて、森下との仲も色恋のほかに、男の生活そのものに自分も参画してゆきたかった。志保はその四カ月ほど山の木工場の男たちの中で、持ちまえの明るい勝気さでいっしょに働いた。

陸軍から五十万円の資金が渡るといふ日、その当日が終戦であった。この山間に何かを構築するつもりだった軍は、貯蔵されていた弾丸をトラックに積んで運び出し、川の流れに捨てた。志保は河原に立ってそれを見ていて、戦争が負けて終った、と確かめた気がした。そのあわただしさの中で、将官と兵士の一部は、森下の林業を継続させてそこで自分も働きたいと云い出していた。五十万円の資金は出なくなったが、軍のトラックを見返り品にする、という案が持ち出されている。奇妙なことに志保は、このとき森下の事業に興味を失っていた。こんなところにいてもしょうがない。志保の心はもう、東京の慣れた街へ向いていた。

東京へひとりで先に帰るといい出した志保に、森下はあやぶんだ答えをした。

「女ひとりで今の東京で何が出来る」

志保より十歳年上の森下は、材木の仲買をやってきた仕事柄もあって、太っぱらな表情に狡かつさを秘めて、一種の男の魅力を持った人間だった。彼は、きらりと光る視線で志保を見た。

志保はもんべ姿で、きちんと襟を合せていた。色の白い、たっぷりとした派手な顔だ。

「あら。そうかしら」

と、志保は鼻の上に笑いを浮かべて云った。

「こんなとき、女ひとりの方が却ってやり易いんじゃないかしら。どうせ、新宿ですよ。知った人も多いわ。私、大体、先ず行くところも考えているんですよ。どうしても駄目なら駄目です。また帰って来たっていいんだもの。だけど、あなただって、東京にひとつ足場を作っておくのはいいとおもうわ」

彼女は決してそれを口先で云ってはいなかった。理をとおした上で情もこめていた。またそれを裏づける実行力のあるのも森下は知っていた。

こうして柳井志保が新宿へ戻ったのは、終戦後もない十月だった。途中の列車は座席と座席の間にも人の割り込んでゐる混雑で、身体をうごかすきもなかった。トンネルを通過するとき、ガラスの取れてしまった窓から、煙が巻きながら車内に流れ込んだ。志保は煙でまっ黒になった顔を膝の荷の上に伏せて、心の中ではこれからの行動を必死に祈っていた。新宿へ着いたらやっぱり先ず、待乳山まちちやまの聖天さままでお参りにゆくのも決めていた。

志保は杉並の松ノ木町に間借りしている親戚の家に身を寄せると、お召の着物の上にもんべをはいて出かけた。出かけた先は、彼女の派手やかな仕事の間に知るようになった或る大きな料亭の女主人の許だった。麻布で焼け残ったその家は、表むきはまだひっそりしたまま、内部ではGHQの将校を招待した宴などがひらかれて、志保が訪ねていった夜も、殊更に古風に裾をひいた芸者が廊下を通っていった。それは昨日今日、新宿や浅草で見た雑鬧とあまりにかけ

離れていた。

「さすがお宅ですね。もう御商売はじめていらっしゃるんですね」

戦後初めて逢うから、どっちも無事を云い合ったあと、志保は感服した表情で廊下をのぞいた。

「こうなるとね。今度はアメリカさんを招待なさんなきゃならないんだわね。そういうおとくいさんからやいやい云われて始めたようなものよ」

志保よりずっと年長の女主人は、そう云うと、甘いものどう？ と羊かんを切ってくれた。

「虎屋でしょう。まあ久しぶりですわ」

この節らしいあいさつをしてから、切り出した。

「今日は、お願いがあつてうかがったんですね。私も働きたいとおもつて舞い戻ったんですよ。新宿に少し土地を借りられないかしら。こちらの御親戚があつたでしょう。ほら新宿の金物屋さんで、土地を持ってらっしゃるお宅。あちらにお願いして頂けないかしら。いいえ、店たつてほんの屋台ぐらいの場所でもいいんです」

「そう。あんたやるの」

相手も苦勞人だから、すぐ真顔で受けて、

「森下さんと別れたの？」

「そういうわけじゃないんですけど。あっちはあっちで、山の仕事が続いていましてね。どうも私、やっぱり東京っ子なんですわ。戦争が終ったとおもったら、もう、あんな山の中にいられせんわ。たった四カ月余りだったんですけど、よくも居たもんだ、という気がしちゃって。」

戦争中だからこそいたんですね。だから今度、小さな店でもやるとしたら、私ひとりですてみようと思つてゐるんですよ」

「そりゃまあ、お志保さんならやれるわよ。それに新宿はあんたの縄張りだし」

「縄張りつてことはありませんけど。なじみは深いところで多少、勝手はわかつてますね」

「聞いて上げるわよ。どうせ焼けあつたそのまんまであるんだろうから」

「そうですか。ありがたいわ。私、もしお願いできたら、一生懸命やります。ええ、一生懸命やります」

氣つぷのよさというようなものが志保にあつて、それが相手に氣持よく伝わる。というより志保は、自分の熱意を、たくましくして相手に伝えていた。これは彼女のさっぱりした明るさと、強い生活力に作用する頭のよさのせいだった。まだ盛り場に夜の賑わいのさかんだったとき、新宿の大きなカフェーで志保がナンバーワンを通しつづけたのもこの性格によつていた。

こうして柳井志保は、その料亭の女主人の世話で、駅前の一隅の、焼けビルのうしろ側に少しの土地を借りた。地主は青山のある大きな金物屋だった。借りたといつてもまだこのとき、権利金などが幅を利かしてはいなかった。立退きを請求されたときは従うという条件だけで、志保はそこに板囲いと屋根だけの小屋を作った。内部は土間と板敷が一間だけあつた。屋号を、この街でかつて彼女がナンバーワンをつづけたときの名をとつて、芳野屋と決めたとき、志保は、バラックに葦簀ばりの小屋にその名の似合わしくないことなど思ひもせず、齒切れのいい口調で職人に愛想を云つていた。

この周囲に、食べもののやの小屋が建つたのは芳野屋一軒だけだった。前方はまだ瓦礫^{がれき}の散つ

た原っぱであつた。志保は大切にしていた割烹着をもんぺの上に着て、自分の店の前に立つた。新宿駅の構内が荒れたまま開けひろがつて遠くまで見渡せた。丸通のあつたつづきに倉庫が一軒残っている。倉庫に住んでいる老夫婦とももう志保は挨拶を交すようになってゐるが、倉庫のかたわらに数本の葉鶏頭^{はげいとう}が、鮮やかな色で伸びていて、それが目にしみた。瓦礫の原っぱの中で、葉鶏頭の赤と黄は、今の志保に、いとしさをそそった。老人夫婦の蒔いた種が、新宿駅構内に沿つた場所で、わが生命を見せてゐる、そうおもうと、志保は、その種を蒔いた老人たちもいとしく、涙を覚えた。

ああ、生きていてよかつたと、涙に誘われた思いが、そんな言葉で胸にあふれてきた。

「あらつ。赤とんぼが飛んでる」

志保がおもわず声を出すと、大工がちょっと振り返つて云つた。

「新宿で赤とんぼが飛ぶんだからね。とんぼぐらいじゃないですよ。青大將がいますよ」

「え、ほんと？」

「ほんとですよ。この間もそこらへんで見たんだ」

「殺さないでよ。決して殺さないでね」

志保は真剣な表情になつてそう云つた。

新宿は、星は戦火をまぬかれた中央線沿線の住宅地につながつてあふれ、夜は夜の欲望の町となつてたぎつた。芳野屋は夕方から夜明けまでの徹夜営業に客のひくことがなかった。

志保は昼からの仕込みでおでんを煮、酒をそろえた。ドブロク、バクダン、清酒。金さえあ

れば仕込みに困りはしなかった。ビールさえトラックで持ち込まれた。二合一勺の配給が、芋や大豆や澱粉でできていたとき、銀シャリが用意できた。

志保は疲れを知らぬげに、いつも張りのある声を上げていた。女つけたっぷりなのに、勝気だから、どんな客とも一対一の応対ぶりで、よどみなく、さわやかだった。少し太い声に、貫禄さえあって、しかもちつともそれが気張っているとは感じさせなかった。

その夜ももう二時近かった。女が連れてきた客もある。十人ばかりの客がドロクやバクダンに酔ってとろんとした目をしてしゃべっていた。志保も酒がはいっている。ひとりの中年の客が、からみはじめていた。

「ママは、目先が利いたんだな。いち早く陣取って、えらく繁昌じゃないか。おれなんか、そんな知恵がないから、この敗戦の町にうろろしなきゃならん」

「あらそうですか。いいえ私だって目先が利いたわけでもないんですけどね。こんな商売しできないからですよ」

「なに素早かったのさ。このへんじゃ一番先だろ。もつともそのおかげでおれはこうして呑んでるよ」

「ええ、そりゃうちが一番早かったでしょうね。とにかく私は、新宿に一日も早く帰りたいかったですよ。それだけなんです。新宿はいいですもの、気どってなくて。大体昔から、新宿は隠れるのにいいところなんです」

「ママも誰かに隠れてるのか」

「いいえ、今度はそうじゃないですけどね」

「なんだ、今度はそうじゃなくて、以前にはあったみたいだな」

「そう。前にはあったわね」

志保はそう云いながら次には何げない笑い声を上げた。

そのとき前の空地で、シユールと、異様なひびきがした。冷たく威圧して消えた。端にいた二人連れの客が、あっと、肩を立てて耳を澄ました。

「なんです？ 気持の悪い音でしたね」

志保も聞きつけていた。

「機関銃だよ」

客は立ち上って外をうかがいたそうにした。

「だめよ。出ちゃだめ！」

客といた女がひそめながら叫び、店の中が一瞬しいんとした。志保が表に聞耳を立てた顔で云う。

「機関銃の音ってあんなんですね。パンパンっていうんじゃないのね。誰か、やったのかな。」

そう云えば機関銃持って歩いてますよ。はち巻して日本刀さげて、竹やりまで持ってねえ」

「敗戦日本の現実か」

「しかし、おmoi出したな。あの、シユルシユルって音、あれを聞くと首すじのうしろのところが、かゆくなったもんだった」

さらばラバウルよ、またくるまではア、と、ひとりが歌い出した。とすぐ連れもあとをつづけた。こうなれば次々と軍歌の出るのがきまりで、志保もいっしょに歌い出していた。

店を閉めてから、志保は夜半の機関銃の音をおもい出して外へ出てみたが、電柱の下に転がっているのは、別の死人らしかった。浮浪者の老人で、顔だけ二倍にもむくんでいるのは栄養失調にちがひなかった。志保は店を開いてまだ一カ月だが、夜明けの空地で死人を見るのは初めてではなかった。

博徒の組とテキヤの大きな組があつて、無秩序にあふれる新宿にその縄張りを拡げながら、そのことでこの街の復興にも役立っているという実状は、このときの東京の混乱を語っていた。だから機関銃を持って歩く男も、日本刀をさげた男もいて、一人、二人はざら、六人の人間を殺したそうなどという若い男もここを歩いていた。透きとおるほど蒼い色をして、目だけ据わった無表情の、そして顔立ちのとなつた男だった。喧嘩だ、助つとだ、とあたりがざわめくのも珍しいことではない。

志保の今までの生活が、いわば新宿の内側にあつたから、同じ側の人間のような気がしないわけでもなかったし、始終そんな男のそばにいて、だんだん度きようができてゆくみたいだった。殊にこの秋、組の若い者たちが角力大会を聞くといふので、寄付を集めてまわつたときのことだった。

まだ夕方の客のたて込むには早い時間であつた。二人の若い男が油障子をあけて入ってきた。一人の客があるのを見ると、男たちは、明らかに礼儀的に隅の方へゆき、向うむきに立った。

「お兄さんがた、なあに？」

志保はちよつと腹に力を入れ、その方へくぐり出て行つた。小柄な背をどことなく意気に、

まっすぐに立てた男が、几帳面なもの云いで用件を云った。

「ああそう。よござんすよ。ちょっと待ってちょうだい」

志保は奥から百円札を三枚握って出てきた。

「これでかんにんして下さいね」

男たちは、やあ、と云って頭に手をやり、腰をかがめて、小声で云った。

「おねえさんとこじゃ、こんなに頂くつもりもなかったんですがね」

「屋台みたいなうちですからね」

「いえ、いえ」

そして寄付帳をひらいて、ね、という上目つかいでひとつを指さした。それは電車通りの百貨店の寄付で、それが志保の今出した百円札三枚と同額だった。

「おや。じゃ、あんまり出しゃばることになるかしら」

志保は狎れた表情になって男たちを見てから、

「だからって、引っ込めるわけにもゆかないじゃないの。いいからおさめてちょうだい」

「はいっ」

男たちは敏しような動作で、志保に署名をさせると、札を述べて出た。意気な身体つきの男は、顔立ちもそんなふうで、志保にほんのり心地よかった。

そんなことがあってから、組の男たちの志保に出会うときの様子が変わって、当りがよかった。気の軽いひとりなど、ある朝、店じまいをしている志保を見かけると、こう云ったものだ。

「おねえさん。何か困ることあったら、云って下さいよ。おねえさんには、氣をつけてあげな

くちやいけねえ、って、親分に云われてるんだ」

「あら、どうもありがとう。そうなの。親分、そう云ってくれてるの。嬉しいわね。よろしくおっしゃって」

「へい」

志保は、寄付の百円札三枚が、そんなに利いてると知らなかった。このときの百円札三枚は、志保の方だって、はずんだつもりだが、それは太っ腹な彼女の心意気というものだった。志保の三百円は、心意気の見せどころだった。相手方にもそれが伝わったのだらう。志保はただ、その三百円が、表通りの百貨店の出したものと同額だったと知ったとき、ちょっとばかり傲^{たか}ぶった、いい気がした。志保はやっぱ、新宿の女だった。

やっぱそういう朝だった。薄明りの中で周囲はさすがに音を立てず、疲労の中で街はまだ眠っていた。志保は油障子の外に葦簀^{よしず}をまわしていた。空地の向うから歩いてくる姿が影のように見える。

「お早う、ママさん」

しゃがれた声でわかった。

「お早う。今、帰るの。寒いわね」

銭湯で逢う女だ。

「寒いわ」

如何にも慄えている声だった。

「ちょっとあったまってゆきなさいよ。まだ火があるわ」

「ちょっとあたらして」

ばさばさの断髪をうしろにたらし、前髪だけくると巻いている。まん丸い顔だから若く見えるが、気力もなげで頼りない顔をしていた。スフのズボンをはいて、男ものだったらしいオーバーをたらんときていた。

「どこまで帰るの」

「十条。子どもが学校へ行くんでね。それまでに帰ってやらなきゃならないのよ。子どもに朝御飯たべさせて学校へ出してやって、それから寝るのよ」

「大変だわね。いくつ？」

「二年生」

「あんた、何か上げようか。おでんが残ってるわ」

志保は、もう火からおろした鍋の汁の中に、とろんと沈んでいる馬鈴薯とさつま揚げを皿にとってやった。この女の寒いのは、疲労と空腹だろうと、おもったからだ。

「お錢、出すわ」

「いらないよ。御亭主どうしてんの」

「中支で死んじゃった」

馬鈴薯を口の中でころばしながら、感動もなげに答えた。

「戦争未亡人か。多いわね」

「ねえ、ママさん。今のうちはいいんだけど。もう少し経つと、子供が気がつくだろうね。あた